

第2回 「古墳時代の富里」

～富里の王と最内陸部の集落～

於：富里市立図書館

林田 利之

2006・9・10

1. 古墳時代の幕開け

およそ3世紀から7世紀及び約500年間の間、北海道や東北北部と南西諸島を除く日本列島の各地に小山のような墳丘をもつ古墳が作られた時代を「古墳時代」と呼びます。古墳の出現は、弥生時代における水田耕作を中心とする農耕社会の発展を基礎とする、「支配する者」と「支配される者」の区別が生まれたことを物語ります。

また、弥生時代では環濠集落と呼ばれる防御機能を有した集落が営まれていたのに対し、古墳時代ではこのような集落が営まれなくなることから、ムラやクニが政治的なまとまりを持ち始めたことを意味していると考えられます。

古墳時代は出現期・前期・中期・後期・終末期などの時期に区分されており、時期ごとに古墳の形や生活様式そのものに違いがみとれます。千葉を含む「東国」と呼ばれる地域は、他の地域以上に近畿のヤマト政権と深い関わりを有していたと考えられており、それらの影響は富里市の古墳時代遺跡にも垣間見ることができます。

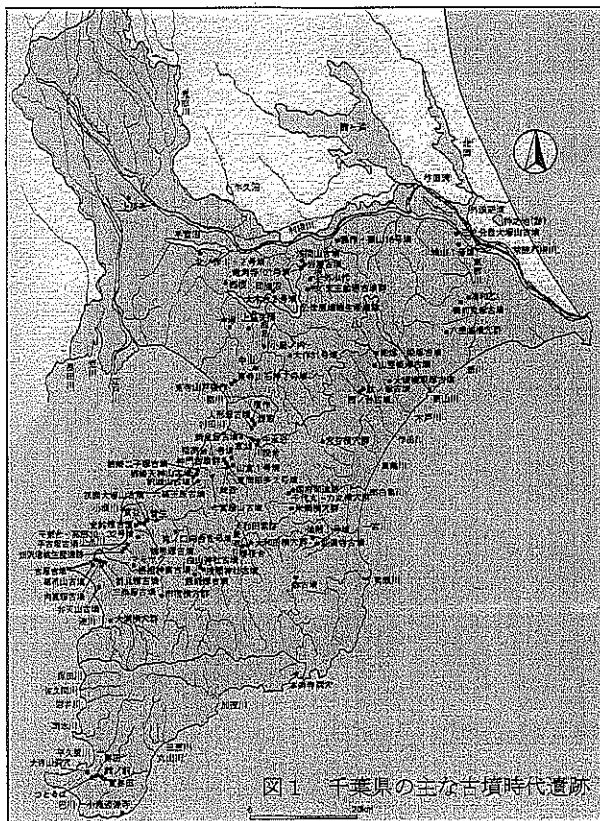


図1 千葉県の主な古墳時代遺跡

2. 各時期の土器

古墳出現期の土器は弥生時代的な様子を色濃く残す土器に混じって、東海地方や畿内地域の影響を強く受けた土器が見られます。

前期になると台付甕と呼ばれる脚付きの壺や、埴形土器と呼ばれる小型の壺が現れます。中期には東海・畿内地方の影響が薄れ、地元的（在地的）な土器が作られるようになります。特に高坏と呼ばれる器の脚が長く、円柱状に変化します。

後期では窯で焼かれた須恵器と呼ばれる硬質な土器が出現し、除々に集落に広まる土師器の坏や高坏には、器面を赤く彩色したものが多くみられるようになります。

終末期では土器全体を占める須恵器の割合が高くなり、土師器の坏などには、畿内のものに酷似したものが出現し始めます。これは、次の時代である奈良・平安時代（律令制）への移行を感じさせる現象といえます。

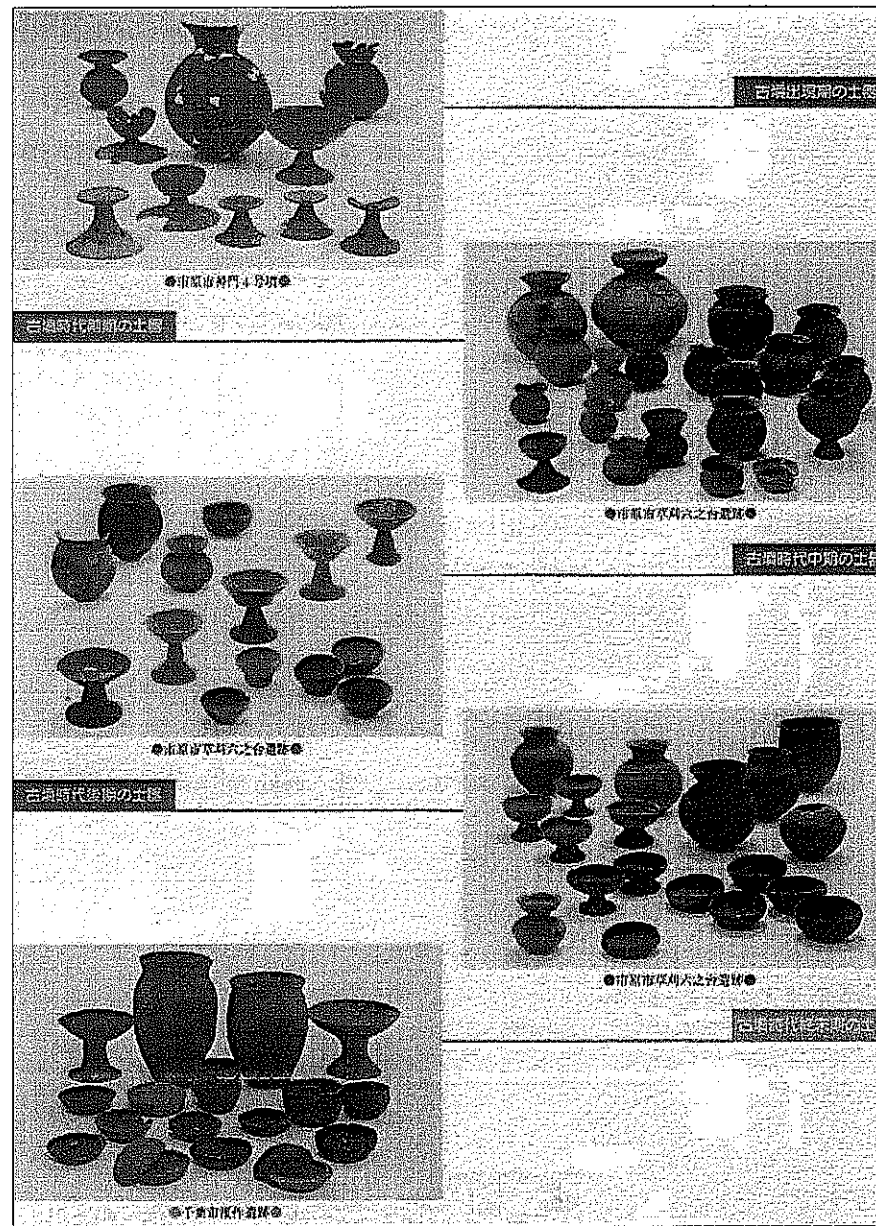


図2 各時期の代表的な土器